書　評

『経験に学ぶ透析医療の災害対策』

山川智之　編著

医薬ジャーナル社

物理学者寺田寅彦は，1923年，45歳の時に関東大震災に遭遇して火災旋風などの調査に従事した経験を軽妙なエッセイに書き残しており，彼の記した「天災は忘れた頃にやってくる」はよくよく知られた伝説の警句になっている．しかし，昨今の一定以上の被害をもたらした国内外の災害の数々を想起すると，そのように楽観できないことは明白であろう．ただし，直接の被災者でもなければ，自らにも到来するかもしれない危惧の念を強く抱いて「準備おさおさ怠りなし」とはいかず，その意味では災害の記憶は風化してしまいがちだと言わざるをえない．東日本大震災もすでに4年が経過してしまっているが，原発を巻き込んだこともあって，その完全な解決にはまだまだ時間が掛かりそうである．

本書は，日本透析医会の常任理事として透析患者の災害対策に長年取り組んでこられた山川智之氏の編著により，世に出たものである（図1）．第1章は編著者が大災害と透析医療の特徴に言及し，災害弱者である透析患者をどう護るかが記載されている．第2章では，過去に透析医療に大きな被害をもたらした災害として，①阪神・淡路大震災，②新潟県中越地震，③東日本大震災，④山梨豪雪災害が取り上げられている．いずれも災害の経過が生々しく具体的に述べられて記憶を新たにさせられ，災害の恐ろしさが再燃するのであった．第3章は個々の透析施設が災害に今後どのように対処すべきかについて，長年この問題に取り組んでこられた専門家が具体的対策を簡潔明解に提示してくれていてすこぶる有用である．

図1

第3章5節で大塚恒子氏（仁明会 精神衛生研究所副所長）が「災害時の心的外傷（PTSD）」に対する支援を記述しておられるが，透析スタッフの難渋する問題の一つであり，熟読いたしたい．この問題については桜美林大学・杉澤秀博教授らが“Factors in Mental Health Problems among Japanese Dialysis Patients Living in Heavily Damaged Prefectures Two years after the Great East Japan Earthquake”（Advances in Psychiatry, Vol 2015, Article ID 265907, 8 pages）を報告しておられるので，併せてご一読願いたい．杉澤論文は，日本透析会・会員諸氏のご協力で得た資料が基になっていることを付記しておく．

阪神淡路大震災を経験された宮本孝氏は，災害発生時の「自らを守る自助」「近隣との協力による共助」「国や公共団体が準備する公助」の「三助」の重要性について述べられていて感銘を受けたが，本書を読み進めるとすべての著者がこれに関して言及しておられ

て納得がいった．わが国の患者は何事においても依存性が強く，さらに透析患者の高齢化を勘案すると，その傾向が増幅するであろうから，第３章８節の「患者教育」はそれぞれの透析施設が日常的に継続して行うべき事項と心得たい．

維持透析を日常的に業務として行っている透析医が，実体験を基にして記載した本書には，さまざまな実施可能な知恵がちりばめられており，すべての透析スタッフに一読をお勧めしたい．洛陽の紙価を高めること，疑いないしである．「備えあれば，憂いなし」を肝に命じたい．

評者　札幌北クリニック　大平整爾